三化労組はこのほど、命を守る闘いを中心の柱に据えながら闘つている三池労組として、格別注目すべき闘いに立ちあがつている。「職業病絶滅」を目指す闘いがそれで、直接の動機をなしたものは、現在新聞で強い発ガン性をもつものとして問題となつている、ベンジジン中毒の実態がバクロされたことによるが、同労組はこのほど政府・会社に対し、ベンジジン中毒その他の中毒に関し「遺族補償」「障害補償」「治療補償」「休業補償」など27項にわたる要求書を提出した。

資本が隠していた癌患者

三化にベンジジン中毒者

問題となっているベンジジンというのは、芳香族アミン類の中の一化学薬品で、三井東圧化学大牟田化学工業所では現在これを、月々菅井化学（和歌山）から五～六トン買い入れ、これを原料の一つにして、I工場（染料工場）でアゾ染料をつくっている。

もともとこのベンジジンは、はるか戦前から長く同工場でつくられてきていたものだったが、その中毒性（発ガン）が顕在化する勢いを察知したか、会社は去る三十五年ベンジジンの生産を停止した。以後原料としての必要量だけ買い入れているわけである。

それでも避けることができなかったと見え、現在三井東圧化学の同工業所ではベンジジン中毒患者が発生、二人の患者が三井病院天領町病院に入院、"膀胱炎"（会社発表によると）の治療中であるという。

三化であばかれた恐るべきベンジジン中毒の実態

さらに会社によれば「過去に三人、ベンジジン中毒による膀胱ガンのため死亡している」とのことである。（三化労組執行部の話）

イギリスなどでは早くから

さて、合化労連発行の"月刊合化"によれば、「ベンジジンやペータナフチルアミンなどの芳香族アミン類によって発生する膀胱ガンについては、古くから知られていた」ことだとし、「膀胱粘膜の底部には二つの輸尿管入口と、尿道出口で形成される三角部がありここが膀胱ガンの好発部位とされている」と述べている。

「同資料によれば、しかも中毒から発ガンまでの潜伏期が十七～八年と非常に長いのが特徴で、芳香族アミンの職歴が一年以下でも膀胱ガンの発生率はかなり高い」と恐るべき事実を明らかにした。事実イギリスにおける職業性膀胱ガンの統計的解析によれば、千九百二十一年から千九百五十年にいたる間に、四千六百三十二名の化学工場従業員中二百六十二名が膀胱ガンの発生を見て、その中の百二十七名が死亡しているという。

中毒にさらされる十五万人

では、わが国の場合はどうか。

まず三菱化成黒崎工場の、ベンジジン及びその同族体、ならびにアニリン系統の製造工程中、還元反応と転位反応を行なう職場において膀胱ガン三名、尿道ガン一名、膀胱腫瘍十九名、膀胱ロイコプラキー四名、その他膀胱癒着充血四十名、計六十七名の膀胱障害患者がいることが発見されている。

その他本州化学、住友化学大阪製造所、田岡染料など、ベンジジン系薬品による膀胱障害患者が発生しているが、中には某化成品会社の要職者は戦時中、労務管理のため時々工場に出入りし、量としては決して多くないと思われるペータナフチルアミンにさらされ、その後十年以上たつてから膀胱腫瘍に罹患、後ガンして膀胱の全テキ出を行なったと報じられている。

以上の幾多の事実からして、三井東圧化学大牟田化学工業所における、ベンジジン中毒がひき起こした膀胱ガンによる死亡例が、過去に三名だったとすることは果して真実かどうか？

ところでベンジジン中毒は、何も上述の染料製造工程やベンジジン製造工程に関するだけでなく、三化労組の執行部の言明によれば全国に数多くある染色加工業者とその大小の工場で働く従業員も当然まきこまれずにはすまない恐ろしい情勢にあるという。まさに十五万人にも及ぶ働く者の命が、非常に強い発ガン性をもつベンジジン中毒にさらされているわけである。

新聞の報道によるまでもなく、合化労連はすでに早くベンジジン・ペータナフチルアミンによる中毒実態の調査に乗り出し、事実をもって傘下労組に警告を行ない、対策をすすめはじめているが、一方その組織内に関係企業を多くもつ全繊同盟もまた、現在調査を開始した由である。

長く事実を隠していた企業

これほど重大な、しかも外国では早くから問題を生んでいるベンジジン中毒に関する問題が、なぜわが国では現在にいたるまでも具体化してこなかったのだろうか。三化労組の執行部は、このことについて次のように語っている――

「わが国でベンジジン中毒問題がようやくも明るみにでたのは、昨年からのことです。なんでこんなことになったのか。それはほかでもなく、過去長い間ベンジジンをつくったり、それを原料に使ったりする企業が、これまでほとんど大企業に限られていたことが原因となっているんです。大企業はそれぞれ必ず、自分の病院をもっているものですから、たとえ膀胱ガン患者が発生しても、そこでベンジジン中毒だという事実をかくしてしまうことになっていたわけです。

ところが事実が外国で明らかになると、影響が自分の企業に波及してくるのを恐れた大企業が、これまで自分の手でつくってきたベンジジンを、中小の化学企業や下請企業をつくって、そこにつくらせる方法にきりかえていったわけです。ところが、そんな中小企業は、自分で病院をもてるなどということはまずないし、ベンジジン中毒患者が発生してくると、しぜん大学病院などの外部の病院に治療をたのむことになるわけです。そこではじめて、恐るべき事実が明るみにでていくことになったわけです」

それでも生産は続けるのか――

三池炭鉱労働者が身をもって知ったこととまったく同じ事実――生産第一主義、人命軽視が三井東圧化学でもまた大手をふって押し通っていることを、まざまざと見せつけられるわけである。同労組の機関紙"三化労"もその第八百八号（六月二十一日発行）の記事で、働く者の怒りおさえがたく、事実を明らかにしながら会社の責任を追及し、述べている。――

「私たちの職場には、ベンジジンを取り扱う染料工場がある。そして私たちは長い期間にわたってベンジジンが、恐ろしい膀胱ガンにかかるとは露知らず働いていた。いや、そのことを知らされず働かされていた。政府当局ならびに企業は、このことをひたかくしにしていたというのが、偽りのないこれまでの実態だったのだ。……私たちはベンジジン中毒による膀胱ガンの実態が、これほどまでに明らかにされた今日、もはや命を犠牲にしてまで生産をつづけなければならないのだろうか」

闘けば三井東圧化学の会社側は職業病の絶滅を要求した三化労組に対し、「前向きで検討する」と言明したというが、とまれ重大決意をもって命を守る闘いをすすめている三池労組として、右に見てきたベンジジン中毒に関する問題はそのまま果して見のがすことができることかどうか。

会社・政府は職業病の絶滅補償をせよ！

いつ私がガンに……

ベンジジン中毒の実態

三年前、合化労連が まず警鐘うち鳴らす

頻尿、血尿など 自覚症状について

ベンジジン 膀胱ガンの症例

潜伏期間二週間から三十年

会社・政府への要求案 職場討議へ

補償、業界のトップを ガラス張りで対策講ずる 会社も前向きの姿勢

朝日新聞に けいさいされた例

時の問題

毎日千五十人が 絶滅へ、職場に力を

へらない労働災害

労働災害は、ここ数年ほとんど減っていません。毎日千五十人近くがケガをし、うち十七人が死亡しているのです。なぜこんなに多いのか――。

しわよせは下請工に

鉄鋼、造船産業では下請工の災害が多いことが特徴です。鉄鋼労連本部に報告される死亡災害のうち八割までが下請労働者で、最近は新鋭製鉄所で一年間に二、三十人の下請労働者が死亡しています。造船産業でも下請労働者の災害発生率は本工の二、三倍になっています。多くの場合、下請労働者は賃金が出来高払い制度のため無理を重ねて働き、疲労が蓄積する（一昼夜から一昼夜半働くという実態もある）それに監督署に届け出た人員の半数で作業をするという実態が、これに拍車をかけています。

あくまで政府・会社の責任を追及

西本さんの一周忌 三川11分会の声明

労災補償を打ち切られ、坑外職場に、三井と政府の手でつき落されながらも、一日も早く元の体をとりもどそうとがんばっていたCO患者の西本正人さんが、突然死を遂げてから早くも一年たつ。

命日に当たる去る十二日、生前西本さんが所属していた三川十一分会は、職場新聞"いのち"の号外をもって、とくに次の訴えを発表した。

× ×

故西本さんの一周忌に当たり、訴えます。

故西本さんは政府・会社の入院打ち切りにより、去る四十二年一月二十一日以来中央工場跡で作業しながら、余暇には体の回復と機能回復の訓練に励んでおられました。CO患者スクラップを目指す敵の攻撃と絶ゆまぬ闘いの中で一にも努力、二にも努力の人でありました。その西本さんの死は、余りにも突然のことでした。

現在日本全国で発生している公害問題、職業病問題、交通戦争の中の一つである三池のCO患者を会社・政府がいかにマツ殺しようとも、あくまで私たちは"生き証人"として生きながらえ、資本主義がつくり出す一切の弊害をなくすため、中心的役割を果たそうと闘ってきました。でも最も大切な生活対策は、一つも具体化しておりません。会社は悪らつです。近い例が大牟田・荒尾の魚貝類や有明のりが、口にされない状態になってしまいました。

皆さん、故西本さんの死因をはっきりさせるためにも、遺族の救済とCO患者の生活補償、治療継続を確保し、政府・会社の責任を追及してゆきたいと思います。心から、ご支援をお願い致します。